

<高等学校>

5 時間目 システムトレード

日本の金融市場では、個人投資家に向けた日経225やFX市場を対象としたシステムトレードが脚光を浴び始めています。

そもそもシステムトレードとは何か？米国市場では歴史が古く、かのブラックマンデーにしても急落のきっかけはシステムトレードから発せられる売買シグナルが、あることをきっかけにして「売り」が多発したことに端を発しているとも言われています。

日本においてはここ数年において一般投資家にも浸透し始めましたが、一部ではそのパフォーマンスを評価するサイトなどが存在したりしているほどです。

当サイト中学校において、人間の感情がよいパフォーマンスを生む妨げになると学びましたが、システムトレードはそういった人間の感情を全く無視して、あらかじめ組み込まれたロジックにそって機械的に売買を繰り返すことができるのです。

もちろん運用に損益はつきものですから、システムトレードで発せられるシグナルに沿って売買を行っても損をすることはあります。しかし基本的にまともなシステムであればロスカットも小幅な損失で収まるようにロジックに組み込まれているのが普通です。

簡単にシステムトレードについて説明しますと、数あるテクニカル分析の中から開発者が数種類の分析方法を選択し、様々な条件をあたえてマーケットの値動きがその条件に合致したと時に売買シグナルが発生するといったものです。中には発生したシグナルを取引システムに直結させることによって完全に自動的に売買が行えるといったものです。ですからシステムのロジックに関する信頼性はありますが、基本的にマーケットの知識を全く持っていなくても運用を行うことができます。

またシステムトレードを導入するためには、システムそのもの自体を購入する方法とシステムから発せられる売買シグナルを購入する方法が2通りありますがそれぞれメリット・デメリットがあります。

以下に表にしてみました

	システム導入	シグナル購入
価格	比較的高い（一時課金）	比較的安い（月額課）
①変数の変更	原則として付加	開発者により
②自動売買	可能	不可能
③業者の種類	一般	投資助言業者
④取引業者の選択	基本的に限定	限定されない

少し表に記載されていることについて説明しましょう。

- ① ここでいう変数（パラメーター）とは、たとえばロジックの中に移動平均線を使用していたとすると、何日の移動平均線を使用しているか？この何日に入る数字のことを言います。15日移動平均線を使用していたとすると、この“15”という数字がパラメーターということになります。このパラメーター自体システムの中で重要な位置づけにありますのでシステム自体がマーケットに合わなくなってきた場合、パラメーターを変更することによってパフォーマンスを改善させることができます。システム自体を購入する場合これが変更できるか否かを確認する必要があります。また中には更新をかけられるシステムもあります。
- ② シグナル配信の場合、メールなどの媒体を通して配信されるため、原則として自動売買はできません。
- ③ システム自体を販売する場合は物販扱いとなるため取扱業者に要件は課されませんが、シグナル配信の場合、金融庁なり財務局なりに投資助言業者として登録しなければなりません。
- ④ シグナル配信の場合、発注作業は手入力となるため業者はどこでも構いませんが、システム自体を導入して自動発注する場合、システムに準拠したインターフェースを使用している取引業者に限られます。

特に FX 市場では、月曜日早朝から土曜日早朝まで24時間継続して取引が行われているため、このシステムトレードの自動売買機能を使うことによって肉体的な負担も格段に軽くなります。

いかがですか？とっても便利でシステムトレードを導入することによって、マーケットの動きに悩まされることも一切なくなりますよね。これで利益が取れれば万々歳です。

でもそんなにおいしい話はないのです。

先ずシステム自体のロジックに疑問が残ります。本当に利益が生まれるシステムなのか？過去のデータはありますが、パフォーマンスを事前に確認する方法はありません。

ここでシステムの開発の手順について簡単に説明させていただきます。

- ① まず取引を発生させるアルゴリズム（構成）を作りこみます。たとえば2本の移動平均線がクロスした時のRSI（相対力指数）の値をみて判断するなどです。この2つの条件を満たした時にポジションを作る売買シグナルを発生させるロジックを組みます。同時に決済の条件についても1,000円やられるかパラボリックS&Rが逆シグナルを出したら決済するという条件を与えます。
- ② このアルゴリズムを走らせて過去のデータと照らし合わせます。つまりこのロジックで売買を行った場合、過去の成績を検証します。この作業をバックテストといいます。
- ③ バックテストを行った結果、思ったほど良い成績が出ていなければ、パラメーターを変更します。

たとえば使用していた移動平均線が 15 と 90 であったら、5 と 45 に変えてみます。それを繰り返してよいパフォーマンスがでるまでパラメーターの変更を繰り返します。これを最適化（オプティマイズ）といいます。

- ④ 次にこうして作り上げられたロジックを実際に走らせてみます。つまり過去に対して実際の価格の推移に対してどのようなパフォーマンスが生まれるかの検証をします。これをフロントテストといいます。このテストで過去のパフォーマンスと照らし合わせて遜色ない成績を刻むようであれば完成です。

細かい作業は省いてありますが、大まかにはこのようにしてシステムトレードのプログラムは作り出されます。

ここで気を付けなければいけないのは④の過程です。

例えば④の過程をいい加減に対処していたり、省いていたとしたらどうでしょう。過去の成績の結果のみで「こんないい成績でした。」と見せられても今後も同じような成績を刻むとは限りません。特にシステム開発段階でヒストリカルデータに対してカツカツにオプティマイズしてしまうと、システムを走らせた後の性格はガラッと変化してしまい、パフォーマンスもそれにつれて急激に落ち込んでしまうのが通例なのです。

しかしながらシステムの購入前の資料にはフォワードテストの成績について触られていないものが多く存在するのです。

システム購入代金やシグナル配信料に関しては少々高額であっても、パフォーマンスさえしっかりしていれば時間の問題でコストを吸収することはできますが、杜撰な開発手順で安物買いの銭失いになっては元も子もありません。投資助言行を取得してシグナルは配信をしている業者のなかにも結構こういった業者は少なくありませんので、気を付けてください。

システム購入前には肝心の成績に対する信頼性に対してはしっかりと見極めることが必要といえます。できれば配信テスト期間があるとか（優秀なシステムでもタイミングによっては損失を発生することもあるので見極めは難しいですが・・・）、事前資料にフォワード機関のパフォーマンスが掲載されているものを選択したほうがよいでしょう。

当フィナンシャルヴィレッジでもシステム販売やシグナル配信を行っていますが、開発段階で約 20 年前からシステムトレーディングの先進国アメリカでレクチャーを受けた人間が携り開発を手掛けたものやその人間が選択した優秀なプログラムなのでご安心してご購入ください。といってもパフォーマンスを保証するものではありませんけど・・・

最後は宣伝なってしまいましたけど、今後日本の運用の主流になるかもしれないシステムトレーディングの今後の行方には着目してきたいものです。